

浄土

七月号



建

法然上人鑽仰会

昭和十一年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授受記録誌第三五二号)
昭和四十一年六月二十五日 印刷 昭和四十一年七月一日 発行

第三十二卷

第七号



変化のほとけ

十一面観音 (平安初期)

滋賀 向源寺 (渡岸寺) 蔵

人間の顔は一つではない。心のありようとともに関も変化する。憎しみ、侮蔑、ごまかしの気持ちがい微妙にも人間の顔を変える。嬉しいとき、楽しいとき、悲しいとき、怒りたいとき、そのときどきによって顔もおのずから変わっていく。いつまでも余所行きの顔はしてられるものではない。すぐに生地が現われてくる。年輪の深さもそのまま個性的顔にと連がっていく。

それに反して、みほとけの顔は永遠に変わらな。誰に対しても同じお顔で接しておられるけれども、人間の浅薄な、あるいは心の痛手が、みほとけのお顔をいろいろに受けとりがちである。そのいとなみに答えるかのように、みほとけは変化のお顔をたくさんに作られた。十一面観音はその代表といえるであろう。寂静と忿怒と大笑の三面で、人間のそれぞれの変化に応じて、答えようとされる。

ときには強く叱り、ときには怒り、ときにはやさしい微笑をたたえる。そのお顔に接した途端に、自己のみにくさを知らしめようとする、ほとけのはからいがそこにある。

みほとけのお顔と人間の顔の多様生はこうまでも違うことを味わう必要がある。

(石上善応)



念仏は妄念のおこる時

申候へどもけがれず。

もの申まざるにもまぎれ候はず。

法然上人御法語

— 目 次 —

表紙「曼荼羅華」松濤達文画

随想	佐藤治子 平井有慶.....	(2)
お盆に寄せて お施餓鬼の五如来さま	吉岡 義豊.....	(4)
座談会 お盆と生活		(8)
— . — . — . — . —		
父の掌	富山和歌子.....	(12)
お経の話 社会悪を懺悔する	村瀬 秀雄.....	(16)
宗教民族話 三角形の怪異	中村 昌治.....	(20)
現代語訳 歎仏偈	吉田 定久.....	(21)
無媒随録	須藤 隆仙.....	(11)
— . — . — . — . —		
家康と三河一揆	鶴田 湛泉.....	(24)
人生相談 仕事のえらび方		(19)
質問帳 お盆のいわれ		(24)
ご法語をいただく		(31)
信仰の手引 心田をたがやし無量の功德をうく		(32)
連 統 絵 話	みんなの法然さま・帰依する人々.....	高橋 良和.....(28)

想

随



有縁の人

佐藤 治子

それは未だうすら寒い時のことであつた。

朝六時過ぎ、いつもの様にお線香を持ち大仏様へ参詣にと、境内へ足をふみ出した時、すでに一人の外人の女性が静かに大仏様を仰いで立ちつくしている姿を見た。香炉に近づくと、足音にふりむいたその人に軽く会釈をして、お線香を供え礼拝を済ませた。その間私をじ

せめて熱いお茶でも上げたいと家へ連れて入った。お内仏様の読経を済ませ、外へ出ようとする住職もこの参詣者に「それはそれは」と目をみはっている。

「せめて御守りを」

と取りに立つ私に

「いいえ。大仏様の台座の下の小石を友人二人と私の分三個頂きました。これで充分です」

と、小石を私に見せた。アルバイトをして旅費を貯めたといいながら、身分証明を見せたその人はまだ二十一才位。平凡な服装でマニキュアもしていない。

「大仏様を拝めて満足しました。僅かの滞在でしたが、この大仏様を心にきざみ、ベトナムへ参ります」

かざらぬ人ながら、眼の清らかな事！

朝夕参詣する時、色々な人に出会う。有縁無縁の人の事をお念仏を唱える時念ずる私は手を合わせて一緒に礼拝をする人もあるし、

「お線香てくさいね」

と、いって手を合わせるなど知らぬ人も

「走る哲人」

と、称した。

「心臓に短剣を突き立てて駆ける男」

と、いわれたザトベックをはじめ、ランナーは多かれ少なかれ、その走りこむ距離を彼等の身体で表情するものである。

それに比した時、確かに彼の顔は、肉体はいかなる時も無表情に見える。オリンピックの記録映画に写し出された彼は、その顎をつたわって滴り落る汗の雫に、ほとんど無頓着であつた。彼がなすべきすべてをし、完走してテープを切った後、彼は疲れた風も見せずして、あたかもこれからレースに臨むが如くに、柔軟体操をしたものである。ひとびとはその余裕に驚き、彼の無表情さとあわせて、

「孤独にして偉大なる走者」

と、たたえた。

四十二・一九五kmの間、彼はまったく孤独であつたにちがいない。孤独はスポーツ者についてまわる。いわば宿命のようなものではなからうか。数少ない勝者も、そして敗者となった多くの者たちも、おそらく心のつと見

ていたらしいその人に

「お早うどこからいらっしやいましたか」と声をかけた。

「東京から」

「こんなに早くに？」

「門の所で一夜を明かし、門が開かれるのを待ってここへ来ました」

「門のそばって、どこで？」

「ベンチで」

「恐ろしくありませんでしたか」

「いいえ。実は一目でもよい。この大仏様だけは見て日本を立ちたいと思い、ここへ着いたのは昨夜の十一時近くでした。遠くにはのか灯りに照らされている大仏様をみて立ち去れず、何か安心感をもち、恐ろしい一人ぼっちなど思いもせず、夜の明けるのを待ちました」

私は只おどろくばかりであった。アメリカの人でこれからベトナムへ孤児の面倒をみに行くというその人に

「寒いから御一緒に朝食を」

と、すすめたが時間がないからというので、

いるが、これが仏縁のきっかけになればと思うのである。朝鮮事変の時に来た一水兵さん日本へ来る度に花をもって参詣に来るバンコクの商人の家族。一夜を門で明かしてまで、大仏様を近々と拝みたかったというこの若いアメリカの女性。私は木の下道の門へと歩き去るその有縁の人に仏様の御加護あれかしと、玄関に立ち見送ったのであった。

アベベの孤独

平井 宥慶

話しは少々古くはなるが、東京オリンピックの際、その最後を飾るにふさわしい、世紀の一戦と称された、マラソン競技をこの目で見て以来、私は優勝者アベベ・ビキラ選手に何か、人生への指針のようなものを教えられた気持となり、それ以来アベベに心酔する一人となった。

四十二・一九五kmをほとんど無表情で直走^{ひたばし}るこのアベベ・ビキラを、人は

奥そこに、果てしなき孤独な思いをもったに相違ない。

アベベが四十二・一九五kmの間感じ続けた孤独に、何人も触れることはできないであろう。たとえ現代心理学が、最新脳生理学がそのすべてを駆使して彼が走りぬいた距離と同じだけのことをばを並べたとしても、徒勞におわるにすぎない。競技を終り柔軟体操をする彼にひとびとは体力の余裕をみたが、彼にとってその体操は、運動の後の整理体操ではなく、彼がそれまで二時間十数分の間味わい続けた、充実し、しかも清浄にして寂靜なる時間を終えて、憂き事しげき世のわずらわしさの中へ足をふみ入れていく前の準備体操であったかも知れない。

彼にとって二時間十二分十一秒二は、まさしく彼の全生命の燃焼の時間であったにちがいない。ここにもしかしたら、仏教で説く“空”のあかしをみることができるかも知れない。彼の孤独は、もはや“彼”という個我をさえ離脱しているのかも知れないからである。

お盆に寄せて

お施餓鬼の五如来さま

吉岡義豊

(大正大学教授・文博)



お盆のセガキ壇には五如来の宝号なまえを書いてお祭りします。宝勝如来ほうしょう(東)、妙色身如来みょうしきしん(南)、甘露王如来かんろうおう(中)、広博身如来こうはくしん(西)、離怖畏如来りふゐ(北)で、それぞれ東南中西北の五方に安置いたします。

わたしたちはおたがいに利己主義で、欲ばりで、損徳の勘定には目の色をかえて真剣になります。それで、折角のやさしく、めぐみ深く、きよらかな心が欲の皮の千枚張りの奥深くにとじこめられています。宝勝如来さまは、そのようなわたしたちを真人間にするために、欲の皮を全部はぎとって、やさしくめぐみぶかく清らかな心を表に出してくださるほとけさまです。

他人のことなどどうでもよい、自分さえよければ、という利己主義の我利我利亡者は、いくら外見をうまくみせかけても、そうそう世間の目はごまかしきれません。自分で鏡をみたのでは一向に変わったところに気がつきませんが、心の清らかな人がみると、たちまちバケの皮がはげて、その顔はきたなくてみにくいまるで地獄の餓鬼がきのようにみえます。心の中のことなど他人にわかるものか、とたかをくくって、その実はガキのような顔で歩いているとしたらどうでしょう。

妙色身如来というほとけさまは、みにくいすがたを取りのぞいて、たちまち容姿端正で、光りかがやく円満な人格

者にしてくださいさるのです。

欲ばりと利己主義をすて、心きよらかに、すがたやさしく生れかわった人々には、甘露王如来が甘露の香水をふりそそいで、身心を爽快にし、おおらかでのびのびとした無上のよろこびをあたえてくださるのです。

欲に目がくらんでいる間は、おのれのものを守るために心の中まで固い鎧をつけて、たえず警戒し緊張しているので、何を食べても身につかないし、本当の味はわかりません。しかし利己心と醜形をすてて甘露の洗礼をうけ真人間にかえった人々は、広博身如来さまの守護をうけて、何を食べてもおいしく、すばらしい栄養になります。その人たちの食べ物には法味という味の素が加えられているからです。

容姿端正、身心爽快、衣食満足となれば、昨日まで我利我利亡者で不安にビクビクしていたことが、まるで悪夢のようです。すでに心に一点の暗いかげもないので何物をも恐れることはありません。たとえば、このような人は地獄の中を歩いても、その歩道には自然に蓮華が生じて大光明がその体をつつむことでしょう。それは離怖畏如来さまが、つねにこの人と一緒にいてくださるからです。

お施餓鬼というのは、ご先祖さまや有縁無縁の精霊をお寺におまねきして、門徒のみなさんが集って一緒にご供養するおまつりです。そのためには、わたしたちが五如来さまの守護をいただけるような人間として、心を入れかえることが先決です。わたしたちの心の中に五如来さまに住んでいただくのです。もしもこのことがわからないで、おセガキをつとめても、精霊さまに供養の心が通じないでしょう。

せめて、お盆だけでも本当に五如来さまにきていただき、欲得をはなれ、まごころをもってご供養し、喜捨し、しずかに手を合せましょう。五如来さまというのは、実は阿弥陀さまが、かたくななわたしたちを極楽浄土にみちびいてくださるために、かりにおすがたをいろいろにかえてあらわれた化現仏なのです。

お施餓鬼の一日だけでも五如来さまの祝福をうけられるようになれば、あかるい家庭、平和な社会はお盆から、といえます。お盆というのは、餓鬼へ亡くなった人も生きている人もひっくりかえりてVを仏さまへ真人間Vに生れかわらせる日なのです。

お盆と生活



司会 今日はお盆についていろいろとお話し合いを頂きたいと思います。特に女性の方々にお集まり頂きましたので、そういった面でもいろいろと話題をひろげて各面々の話し合いを頂きたい思います。

最初に中村先生に、お盆の由来を話して頂きたいのですが。

一、お盆の由来

中村 お盆は皆様も御承知の様に七月八月の十五日を中心とした仏教の行事です。その初めは地獄へ落ちた魂を救うため僧侶に供養すればよいということからです。普通いう盂蘭盆とはウランバナということ、その語源はいろいろいわれているが、さかしまにつるされた苦しみということ。祖先の霊を祭るということとは実に大切な義務であるが、それを守る人のない靈魂は地獄でさかしまにつるされる様な苦しみを受けている。

それを供養するために人々の指導者としての僧侶に供養するということなどが盂蘭盆経等に説かれている。ここに源を発してインド・支那・日本では各々異なった盂蘭盆会が行なわれています。

日本では仏教が伝来した推古朝には灌仏会と盂蘭盆会が一緒に行なわれていた。これはそれまでの日本の農耕文化に大陸の文化が滲透し農作物の豊作を願うと共にその収穫に感謝するために一緒に行なわれたものです。日本に仏教が伝わったということは稲作文化の発達に大陸の新しい文化の影響が非常に大きかったのです。

尾台 稲作文化との結びつきという仏教が伝来した時から大分下っているのでしょうか。市民に信仰された仏教はまず貴族の方からといいますが……

中村 日本に伝来した当初はまず貴族に信仰され、鎌倉時代に入ってから大衆に信仰される様になったとされているが本当はそうではないのです。すでに欽明天皇以前に帰化人達によって仏教が伝えられ、その帰化人達が奉じている仏教による稲作文化が早くより伝わっているのです。その人々の信仰を周囲の人々が見てそれを習ったのです。欽明天皇の時伝わった仏教で何が一番初めに行なわれたかという六斎戒です。これが記録に残る最初のものですが、中国・朝鮮では農民は月の満欠を

生活のめどにしていた。そして新月満月半月の折に祭りをした。その際仏教徒が行なう精進による儀式がよいとして取り入れられたと思う。日本でもこの点を取り入れ、六斎の日には殺生をしてはならないということが行なわれる様になったのです。従って最初から仏教が一般民衆に透け込んだと思われ、それが日本人の祖先を祭る儀式と結びついたのです。少し飛躍しますが、七夕はお盆と関係ない様に思われるが、七夕はお盆の仕度なのです。

三浦 お盆の仕度とはどういう意味ですか。

中村 お盆には柵を作って先祖を迎える訳ですが、七夕も昔は柵を作りそれに旗を飾るところに重点があった。又田の側^{はた}と考えても良いが、今日ではよく分りません。お盆の月は一日に始まり七日に至り精進潔斎の行事に入るのです。そこに竹を飾るのは正月に松を立てるのと同様に魂を迎える^{もて}図に飾るのです。司会 歴史的なことはよく分ったので、三人の方にお盆についてどの様に考えているか、お聞きしたいのですが。

二、お盆の風習

三浦 母が大変信仰深かったので、母の教えのみが脳裏に入っていますが、十三日の迎え火の時はどんなにいそがしくても家族全員が集まる習慣をつけています。その日は蟻一匹

出席者

中村 康隆

(大正大学教授)

三浦 純亨

(煎茶道黄檗庵茗流家元)

尾台 妙子

(大正大学々生)

篠崎 豊子

(主婦)

司会 編集部

とても殺さないで、逆に殺さない方法までも教えられました。そして仏壇の外にまこもを引いて柵を飾り、なす・きゅうり・ぶどう・柿等をつるします。

篠崎 私の郷里は福島ですが、竹で仏壇を飾ってほうづきをつるします。

中村 田とか畑のものを各地によっていろいろな方法で飾るが、仏壇に飾るのは簡素化された方法です。新盆の時には家の外にまで簡単に飾ってお迎えするのです。

尾台 私の方ではお盆の藪入りの日に閻魔さまにおまいりする習慣があります。

中村 全国的ではないがその習慣はあります。特に鎌倉時代には禅宗を中心に閻魔とか十王への信仰があったのです。

尾台 私達はお盆と藪入りを何か一緒のものに考えがちですが、今にして思えばそれはそれ自身深い意味があるのですね。地獄の釜の蓋が開く日が藪入りと聞いておりますが。

中村 お盆は先程いった通り先祖の霊及びまつられない霊に対して供養する日なのですが、そういうことを行なうことによって地獄の釜の蓋が開くというのは地獄の亡者といえども救われるということだと思ふ。そして我々の地上に於ても人に仕えている人、いろいろな職業に縛られている人でも、その日は解放されるという一種のリクレーションの日という

ようなものです。そして使用人を親元へ帰えしたりするが、敷入りだけが強く感じられ、お盆が忘れられた形となっている。

尾台 東京でも七夕のあと浅草でほうづき市が開かれるので、東京でも飾りつけが行なわれたと思いますが。

私は今川崎の田園の中に住んでいますが、その土地の風習は矢張竹で組み立て、外へ出し、おがらを焼いて先祖様が来てから、毎朝家の主人が先祖様を連れて田を廻る風習があります。

司会 私の郷里は滋賀ですが、十三日の夕方田へ行つてろうそくをあげ、その火をほうづき提燈に移すのです。移すことによってその火に魂が移り、それを家に持ち帰り宿つていただく、そして十五日の夕方、その火を川へ流す風習があります。

中村 普通は十三日の夕方迎えて十六日の朝送るのですが、それが各地で行なわれているとうろう流し、しょうろう流しとなって十六日に行なわれている。これは日本人の古い考え方でお迎えした魂を極楽の世界へ帰えっていただくために行なうのです。又一つの考え

方はそれを送ることによって、私達が犯した罪とがを全て流すという願いをこめて行なうものなのです。

三、お盆の信仰

司会 お盆と信仰を考えた時、どの様に感じますか。先程、三浦さんは母より教えられたといわれましたが。

三浦 母は先祖があつて自分達があるのだから先祖を大切にしないといわれたが、私共は維新の時からキリスト教になった。ニコライ堂ですが、四月十八日の復活祭にはよく行ったが、母は仏教を信仰していたので、矢張晩年は帰するところみ仏の教えにもどった様です。

中村 お盆についての俳句等もほとんど

たまだなのおくなつかしや親の顔

盆なりとむしりけるかな塚の草

とかいう様に、みな親先祖を敬うものが多いあります。これは日本のみならず東洋民族の共通した道です。

三浦 十三日の夕方迎えて、十四・五日の二日間お献立して珍しいものをご馳走しました母はご馳走とは走ることだと珍しいもの、新

しいものを集めて差し上げます。近くには祖母、父等の好物を作り、それを上げるという大変すばらしい風習を残してくれました。

中村 そういうものを通じて日本人の心の奥に流れているものが伝わっていくと思う。

三浦 亡くなった母が常に身近かにいる気がします。

四、お盆の行事

中村 先程尾台さんがちょっと十三日の入馬の話をしました。十五日にはそれを外に向けるのですか。

尾台 十三日にはなすやきゅうりで作った馬牛を内に向けておきますが、十五日には丁稚が帰ってくると、送り火を焚き、そのあと主人からそれを次々にまたぎ、最後の丁稚がまたぎ終ると家に入りお祈りをしたことを覚えております。

司会 篠崎さんは信仰としてのお盆をどの様に受けとっていられますか。

篠崎 お祭りの様な気はしますが、信仰と結びつけた感じはあまりありません。

司会 先程三浦さんがいった様なお盆の行事についてはどうですか。

篠崎 欄を作り色々な飾り物をしました。

中村 三浦さんのところでは？

三浦 十四・五日にはいろいろ作りますが、十五日になると母は俗にいうお・迎・え・や・さんのために川へ流すものと食べられるものは別々にしておきなさいといわれました。



座談会風景

中村 流すのは十六日ですか。

三浦 十五日の夕方流します。近頃はお・迎・え・や・さんが来ませんので川へ直接流しにまいます。そして後を振り向いてはいけないといわれましたが、迷信的かも知れぬが、何か振り向けないのです。

中村 それはお墓へ行ったら矢張り向いてはいけないというのと同様に日本人の気持が流れているのです。

三浦 それにはどのような意味があるのか知らないくせに自然にそうせざるを得ない習慣となっておりまう。

中村 知らないうちに昔の人の気持というものが少しずつ流れているのです。

三浦 でも小さい頃は大変だと思ったが、母が亡くなってからは本当に良いことを残してくれたと思っております。

司会 お盆が祭りの様だとされますが、三浦さんが申された様に、祖先あつての自分であるという様な反省がなされる祭りでありたい

篠崎 福島で行事にジャンガラという踊りがあります。その中に念仏みたいのが入っており、それを唱えながら踊りをするのですが、

無意識のうちに念仏を唱えることによって、それを覚えるという風習があります。

中村 それは福島だけでなく、長崎・平戸・唐津の方でも行なわれている。ジャンガラとは鳴り物の音から出たものと思います。これは一種の念仏踊りで豊作を願って、田に害虫がつかない様にと祈る行事です。

篠崎 講みたいのは別に授からなかったが、年をとってくるにしたがつて、何か念仏講とかに親しみをもって来たのですが。

中村 昔は念仏が生活と結びついていたので。今は死んだ時だけとか坊さんの唱えるものであるとされるが、もっと身近かに生活と結びついたものでなければいけません。毎朝仏壇の前で念仏を唱えることがその日の出発となるし、晩に燈明をつけ手を合せて一日の無事を感謝することによって、仏教の生活の中に溶け込んだ安心した日々が送れるようになると思います。

篠崎 お盆というと年寄が仏壇を飾り、若い人は盆踊りとかで外に出してしまうのですね。

中村 三浦さんは母から教わったと申されたが、家庭での信仰が女性から女性へと受継が

れていくのですが、これはごく昔からの形で一軒の家で祭りをするのは、初めは女性が行なったのです。

五、お盆と女性

三浦 女性から女性へと申しますと、家風というものは女性が作るというようになりますね
中村 家庭では母の感化が一番強いですから
三浦 私もその様に思います。父と母が本当に争ったということは見なかったが、父の方は個人主義的なところが見えました。家長制度というか、父は何んでも命令し母はそれにつかえていました。矢張母の仕事が多ければ多い程、父より荷が重く感じた。

中村 子供にはいろいろなくせがあるが、母に育てられていくうちに直るし、子供の性格を作り上げていく上に、母が一番の力をもっていると思います。同様に一家の信仰というものの、家風というものを伝える上に女性が一番の力を荷負っていると思います。

尾台 私の母は観音の信者で、私から見てもエコヒイキなく純粋なものでしたが、実践というところが一番身にしみていたらしいですね。ですからお盆の時にも飾りつけとか、行

事とかいう意味にもとったでしょうが、まず下の人をかわいがる、それから自分は朝晩念仏を唱えるが、若い人にはそれを見させている中に教えている様でした。

篠崎 一般にそうですね。強制はしません。

中村 強制すれば反駁します。母のいい分は強制せずに見本を示しているのです。

篠崎 ですから私共が美しい良き思い出として残せると思います。

中村 人間の生活には何もいらない愛情というものが一番大切なのです。全てのものをささえているのがその様な情愛だと思います。

三浦 私が今だにうれしいと思うのは、どこからか珍しいものをいただいた折には必らず先祖にお目にかけてから食べるという習慣が自然のうちに家風となったことです。そのことから日常のご飯にしろ、お茶にしろまず先祖にさしあげてからいただく様になりました

六、お茶と禅

中村 お茶の精神とは実はそこにあるのです。十時にしろ三時にしろ、家中の者が集まって飲むとかで先祖にあげるところにお茶の精神があるのです。現在ではお茶会と

かいう面に強調されているが、これはその一部なのです。

三浦 お茶の精神は禅から来ていると思いますが。

中村 禅から来たのが一番ですが、お茶を飲むというなかに仏教の精神があるという考え方です。これが今日の茶道のもとなのです。

三無 お茶は保健衛生の上からも飲むことによつて解毒の効果がありますから、大変清らかなものだと思います。このことよりこの大変美しい清らかなものをご先祖様にさしあげるといふ意味になると思います。

新会員紹介

文京区初音町二〇	三好 海旭
豊島区堀ノ内九九七	羽柴 すぎ
世田谷区北沢二の二三八	森 巖 寺
杉並区桃井一の二三の六	中原 直治
茨城県下館市奥田	奥田美江子
福島県耶麻郡北塩原村字金山	芳田 七郎
山形市六日町	極 楽 寺
秋田県由利郡岩城町龜田	正 念 寺
新潟県西蒲原郡巻町大字福井	塚本 讓
青森県八戸市大字市川町字下	
大谷池	
北海道松前郡松前町豊岡	石田 由藏
北海道松前郡松前町松城	山本 龍海
	光 善 寺

無媒随録

須藤 隆仙

最近つくづく、仏教に帰入したことを有難いと思う。

もし私にして、仏教というものがなかったら、それは、いまよりも、もっともっと暗澹たるものだったろうと思われる。＂チンピラやくざ＂におとる私だったろうと思う。

仏教のために現在の生活がとくべつ飛躍したというわけではないが、たまさか仏さまを拝む気になれただけでも、有難いことであり幸福なことだと思っている。

そんな気持でこの頃は、無性に『日本書紀』を熟読している。日本書紀には、仏教が日本へ流入してきた当初のことが、いろいろと書かれている。それらを読んで、現在の私がその仏教によって救われているのだと思うと、

改めて私は、日本書紀さえも經典のごとくに幾遍も読み返すのである。

欽明天皇の十三年、冬十月、百済の聖明王は、怒唎斯致契（ウリシチケ）などという使者を日本に遣わして、釈迦像や幡（はた）、経巻などを貢献した。

学者の研究では、それを欽明天皇の十三年とする書紀の書き方は間違っているのだそうで、それはじつは十三年でなしに、即位八年なのだそうである。

それはともかく、書紀には、そのとき百済王が貢獻の趣意書を添えた、その趣意書の内容が転記されている。

それによると王は「この法はもろもろの法の中において、最も勝ぐれて為す」と述べている。そして天竺より三韓におよんだこの教えを、謹しみて日本へおくるが、それは「仏の所説、わが法は東に流えんということ成果すなり」といつている。

これは、釈尊が「自分の説いたこの仏法は東方へ伝えたい」といつておられる、その釈尊のお言葉によって、自分が責任をもってこれを東方たる日本へおくるのです、という意味である。大般若経の中で釈尊は、この法は

「東北方においてまさに広く流布すべし」といつておられる。百済王は、この説を感激してうけたのであろう。自分は釈尊のこのみ心を実行しなければならぬと思って、それで經典などを日本におくったのである。

釈尊が、これを東方に伝えよう、といわれ百済王がそのことを果された、蘇我、物部の大臣たちによって賛否両論はあったが、とにかく日本国中に広まって、日本は仏教を骨にもつ国となったのである。

日本書紀のこの記録を、私はただただ有難いと思う。百済王も有難いし、釈尊のみ心がまた一層有難い。

仏教の国に生まれ、仏教の国に育って、それでいて少しも仏教徒らしくない＂でくのぼろ＂ではあるが、それにしてもこの因縁の中に生をうけたということが、有難いのである。如来の本願というものが、この＂でくのぼろ＂を光被しているということを、釈尊は教えてくだされ、百済王はそれを運んでくださった、私はまた逆にこの道を西南方に仰いで、合掌するのである。

父の掌

富山和歌子

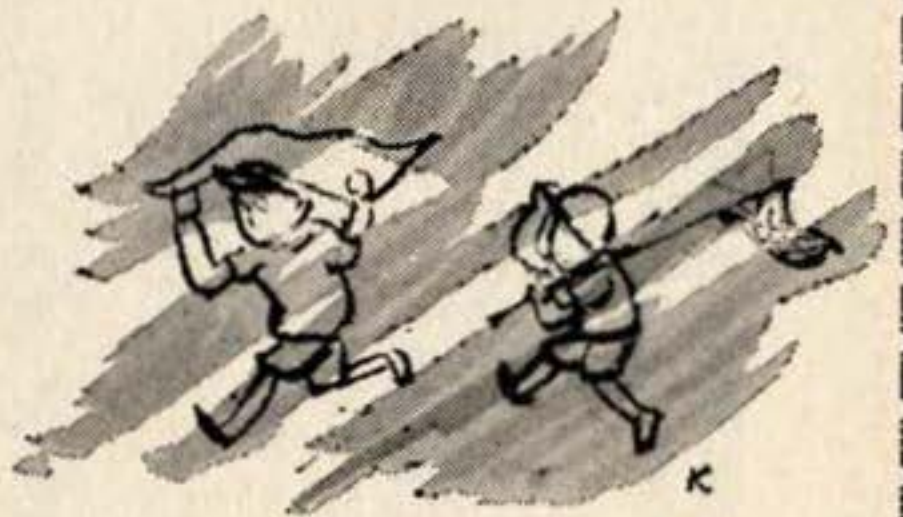
父母のもとを離れて都会に学生生活を送るようになってから、もう五年になります。島の父母からは七月のこえを聞くと同時に、何日に帰るのかという具体的な帰省の催促がしきりです。

夏がくると、都会の人々の心は自然と海だ山だと騒ぎだすものようです。けれど、レジャーや一時的な郷愁のために、それに向って旅立つのと、そこに待っている人に向って帰って行くのとではまるっきり意味が違います。

若葉の五月から麦の秋まで、その初夏の便りを、「夏の休みが来たら、早く早くお帰りなさい」と必らず結んでく

れた、南の小島の私の父と母へ。また、無縁をお許し下さるならば、スイカやウリを用意して、帰ったら庭の草引きをたのもうなど、何かと心づもりして子の帰省を待っておられる田舎の御両親へ。私の友人達にかわって、なつかしさと感謝の想いをこの一文にこめてお届けいたしたいと思います。本当に本当にもし無礼でなかったら。

私の島のふるさとは、島原の乱や天草四郎などで、隠れキリシタンの島として知られる天草です。よく、島民全部がそうなのかと質問されますが、いいえ、私の育った御領という当時わずか二千戸ばかりだった村には尾寺も入れて七



つの寺院がありました。

島の別れは勿論船の別れです。島の人々はその別れに際しては子に送る言葉として、こう申します。

「離れとったってちゃ、いっでん仏さんのそばに立っくらすただけん」いつの時代でも大切な子のことは仏に祈らねばならなかったでしょう。天草の人もその九割がそうです。島をふるさともつ者のひとりよがりかもしれせんが、私はいつも思います。人の故郷は島がいい。船の別れを知る人は、いつまでもその夢の頭上に別れのテープを流しつづけて島を忘れることがないからです。殊に少年のふるさととは島がいい。さらさら少年の夢をめぐるものが、浄土の宝樹の並木にふく風の音であるように。夜毎に父母の祈りを聞くことができるようにと。

私もその少年の一人ですから、私の夢の頭上にはいまだに五色のテープがさらさらと流れてやまないのので夜毎に父母の声を聞く想いがいたします。

忘れることのできないふるさと、いつも想い起して忘れることのない人を持つことは、幸せも、最上の幸せといえましょう。すべての人の楽しいでもあります。お釈迦さまも母を尊うやまうことは楽しい。父を尊うやまうことは楽しいと吐露なさ

っています。

念々に想起してそして忘れず……というお念仏と、念々の中に父母を置くこととは、同じことではありませんまいか。

仏は仏、我らは凡夫という真実な峻別をもって浄と穢の断絶意識、もしくは絶望感といったものをしっかりと握りしめたうえで、改めて仏の側からの救済を願うことが浄土の教えでは第一義であるとは思いますが。しかし、現代社会の若い世代には、もっと身近な、もっと愛し敬うべきものにおいて、やさしく仏を語らねばならないと思います。仏と人との関係は親子の関係のように親しくあたたかいものであると。そして、最も近いにもかかわらず、ふっとある一瞬に最も遠い存在になってしまうこの事実を一つの疑問として提示することによって、若人に何かを気づかせることになると思います。

こんなことをいった友人がいました、「こうして自分だけがどんどん勉強していると、母の無学がたまらない。あなたは尊敬できるお父さんお母さんがあっていいわね」と。ちなみに、彼女のお母さんは、女手一つで子供達をみな大卒まであげられた方、私の父は小さな中学校の校長です。尊敬のことをいえば、私の天草よりも、もっともっと遠い

南の島で一人、娘達のために労働しているこの母親は、どれ程尊敬してもしきれない筈です。その時、私は、いわゆる成長期の若者にありがちな気持として、彼女の気持もよく解りましたので黙っていたのですが、私が父母を敬うのは、決してその学問の有無ではありません。

それは何と少女趣味など笑われるかもしれませんが私の父が、私の頭を撫でることによって、その愛情を示してくれるからです。私は今年二十四になりました。そんな大きな娘の頭を撫でて「いい娘だ」もないもんだ。と照れやのあなたはおっしゃる。しかし、愛情や尊敬は、やはり形ある行為やことばとして示されなくてはウソだと思います。

それは小さい時からそうでしたが、高校の三年間大学の四年間、春夏冬の休暇のたびに帰ると父は必ず私の髪を撫でながら、きまって、「大きくなったな」と申します。弟に対しても妹に対しても同じです。そんな時、その父の掌の下で、「大きくなったな」という言葉とは逆に、私はほとんど小さくなってしまいます。幼い純な気持になっていく自分の心の変化がよく解ります。先生方にもお世話になり、友人達もやさしくしてくれ、島の父母もすぐそこにいるような学究生活ではありました。しかし騒々しくあわた

だしい都会の毎日は欠点だらけの私に、激しい言葉をはかせ、落ち着きを失わせ、目をひからせたり、打算的にならせ、人の心の裏を裏をと見せるようでした。イライラの連続でした。それに汽車の旅に長く、すっかり疲れきって、やっと帰ったわが家です。その門口で父の掌が待っているのです。どんなにか多くの大人達が、掌をつかって人の頬をうち、子供を責めたことでしょうか。いいえ、そんな暴力はふるわないとおっしゃるかもしれませんが、掌をもつて頬をぶってやりたいイライラした気持になられることはしばしばであると思います。

純真な子供はその掌にお菓子をもらい傷ついた子雀をあたためます。掌は捧げもつために、合掌するために、そして、慈しみの行為のためにあるべきであります。み仏の掌はいつもそっと純真な人の頭上に置がれているはずであります。そして今夜のように初夏の風のやさしく吹き入る時には、置かれたみ仏の掌が私の髪を愛撫しているのだと、詩人はいつも風をそのように感じ詠いつづけてきました。

父の掌の下では高い熱にうなされて、ふっとめざめるといつも額に置かれていた不安げな母の掌のことや、仏壇の前で私のために合掌せられていた祖母の掌のことが想い起

されて、いつか、私の瞳はやさしく静かになっていき、わけもなく、泣けそうになってしまいます。こんなに大事に守ってくれる人のあることが誇らしくなってきました。み仏の掌は、つねに人の純潔さ、童子性と直結してそこに置かれています。素直に素直に合掌せられたその手に、み仏のそれがかさねられます。み仏の語りかけも又、先見や巧みのない純な一心に聞き入らんとする童子の瞳に向ってなされます。

私達の行為がみ仏の賞でるところとなり、そのごほうびに、そのあたたかい大きいみ手で頭を撫でてもらってニコニコよろこぶ、そんな無心な仏の子になりたいものと思います。

一心に心をかたむけて、敬慕してやまないみ仏が、どんなにか私のことを大事と思い、常に守っていて下さるかを父の掌は私に教えてくれます。そしてその掌は、私の心を素直にし童女の昔にかえらせ、決して決してみ仏を忘れさせません。

私は伊良子清白の「漂泊」という詩の一節が好きですがここにも童子性童女性を呼び起すものとして、秋風とともにほのかにみ仏の掌がおかれています。

亡母は

処女と成りて

白き額月に現はれ

亡父は

童子となりて

円き肩銀河を渡る

いくら友人達の御両親であるとはいえ見ず知らずの方に向って、甘えてみたり、偉そうなことをいったりする私の失礼をお許し下さい。いつも彼女達が、どんなにか自分の親こそはと誇りに思い、自慢し、感謝しているかをお話したかったのに、私の田舎の話になってしまいました。

どうぞ、帰省をたのしみにしていた彼女達のために、私のために、「大きくなったな」と、その心と身体からだの発達を喜んで下さい。けれどいつまでたっても、「あなたは私の可愛い小さな子供」だと、そのみ仏と同じ掌で、慈しんで下さい。可愛くてたまらないというように見入って下さい。

その時、海や山の緑深い故郷で、心の故郷といわれるものがなんであるか、み仏が何であるか、私達は木陰を渡る風の音に聞くことができます。

（お 経 の 話） その七

— 観無量寿経（一） —

社会悪を懺悔する

村 瀬 秀 雄

大衆と共に浄土に往かん

観無量寿経（略して観経）は浄土三部経の一つであるというばかりでなく、実に絢爛たる経典であるとして知られています。いま観経を拝読するに当って、どうしても善導大師の観経疏を手引としなければその真意を理解することができません。それと同時に法然上人の見識高い御解釈によることなしには、観経の真価をくみることができません。従って観経は大師と上人との指南なしには、その字句だけでは、もっている意味を理解し得ないことになります。さて大師は疏の序文にこう申されています。

「娑婆の化主はその請に因るが故に即ち広く浄土の要門を開き、安樂の能人は別意の弘願を顕彰したまう。その要門とは即ちこの観経の定散二門これなり。定は即ち慮をやめて以て心をこらし、散は則ち悪を廃して以て善を修す。この二行を廻して往生を求願するなり。弘願というは大經に説くが如し。一切の善惡の凡夫生ずることを得ることは、みな阿彌陀仏の大願業力に乗じて増上縁となさずということなし」

お釈迦さまは韋提希（いだいけ）夫人の要請によって浄土の要門——定散の二門——を説かれ、阿彌陀さまは四十八願をお誓いにな

り修行なされ誓願成就なされて、善惡の凡夫をお救いになりました。ここで増上縁ということはお念仏を称えれば罪惡が消滅し、仏さまの來迎を得ることとあります。また続いてこう申されています。

「仰ぎおもんみるに、釈迦はこの方より發遣し、彌陀は即ち彼の国より來迎したもう」

お釈迦さまは現世において、阿彌陀さまの浄土に往くよう衆生に勧め給うているし、阿彌陀さまは浄土から來迎されるのであります

このように大師は、いつも大經と観経とを並べておられます。あだかも両經の一つのお経であるかのように取り扱っています。そしてこうも申されています。

「十方恒沙の仏、六通をもつて我れを照知したまえ。いま二尊の教に乗じて、広く浄土の門を開かん。願わくはこの功德を以て、平等に一切に施し、同じく菩提心をおこして、安樂國に往生せん」

このようにお釈迦さまと阿彌陀さまとの双方の教えを同時に並べるのであります。そして自分だけでなく衆生とともに、同じように安樂國に往生することを願うのであります。

号泣する韋提希

観経を繙くと、まず第一に王舎城の悲劇が記されています。

阿じや世という皇太子が、悪友だいたったに唆かされて反逆し、父王びんばしやら王を奥室に幽閉しました。国王夫人の韋提希は、自分の身を香水で清め、肌を蜜を塗り、その上に麦こがしをつけ、飾り物にぶどう酒を入れ、獄室に通って王の飢死を救いました。こうした韋提希の行為を知った阿じや世は、大いに怒り「我が母はこれ賊なり」といって、剣をとって母を害しようとしています。

さすがの臣下たちも「未だかつて無道にして、母を害することあるを聞かず」と強く阿じや世に迫りました。そこで阿じや世は剣をすて、母を害することをやめ、そのかわり母を深宮に閉じ込めました。

韋提希夫人は幽閉せられて、憂慮し憔悴し、雨のように涙を流して悲泣しました。そしてお釈迦さまがお弟子と共に王宮に來られるとその面前で号泣しながら申しました。

「世尊、われむかし、何の罪ありてこの惡子を生める。世尊もまた何んの因縁あつて、

だいたったと共に眷屬となりたまう」

話がさかのほります、びんばしやら王は世継ぎのないことに苦勞し、早く一子をもうけたいとの一念から、使者を山中に出して、そこにいた仙人を殺させました。その時仙人は、もし自分が生れ替って皇太子となったならば、きっと父王を殺すであろうと予言します。この予言に恐れを懷いた王は、夫人に命じて高樓で子を産ましめます。産れた子は下に落ちたものの、予期に反して僅か指を折っただけで生命に別条ありませんでした。

この子が阿じや世で、成長してから釈尊の從兄弟の堤婆から相談をうけ、自分を殺そうとした父王を殺し、自分が王位につこうとしたのでした。従って父王が拘禁されるに至った事には、それだけの因縁がありました。ところが韋提希夫人には、何等悲境に泣く因縁がないのです。ただ父王の命を救わんとしただけで、自分の産んだ子から賊呼ばわりをされ、しかも一室に幽閉される身となったのです。これはどうしたわけでしょうか。

凡人に説いた經典

続いて經典にはこう訳してあります。

「今世尊に向つて五体を地に投じて哀を求めて懺悔す。ただ願くは仏目、我をして清淨業の処を觀ずることを教えたまえ」

王宮の悲劇は皇太子阿じや世のために起きました。父王も韋提希も自分たちの子のために、まさに殺されんとし、今は幽閉せられています。韋提希夫人にしてみれば、自分の宿業によつて苦しめられていると思うより外はありません。阿じや世の惡業もまた自分の宿業と思えばこそ、お釈迦さまの前に頭をたれて懺悔しました。他人の犯した罪も、やはり自分から生じたこととして懺悔したのであります。衆生はすべて流轉の世界から逃れることができません。こうした現世のすがた、つまり罪惡のすがたを反省したからこそ韋提希夫人は懺悔したのであります。自分ばかりでなく他人を含めた社会全般の罪惡について懺悔しました。また經典には夫人に対して

「汝はこれ凡夫にして、心想るい劣なり」といっています。夫人はけつして聖人でもなければ、菩薩さまでもないのです。普通の一社会人にすぎないのです。その心はまことに弱く劣っている人であります。

このように泣き、悲しみ、歎く凡人たる一人夫人に対して、お釈迦さまが救済の説法をされたのが観経であります。

そこでお釈迦さまは、夫人のために多くの仏国土の有様を示されました。しかし夫人は「いま拝見した仏国土は何れも清浄であって光り輝いています、私の欲している願いは阿弥陀様の極楽世界に生れ替ることであります」といって、改めて弥陀浄土をみせてもらうことになりました。

不孝は畜生と同じ

「そのとき世尊、韋提希に告げたまわく、汝いま知るやいなや。阿弥陀仏ここを去るかと遠からず」

この不遠ということについては三つの意味があります。一つは極楽は十万億仏土をすぎたところにあるとはいいいながら、一つの距離が示されているのであって、決して無限の遠方にあるわけでないということです。二つは道のりこそ遠いに違いないが、往生する場合には僅か一念にして直ちに往生できるから遠くないということです。三つには浄土を観ずれば、この身この生において浄土を見うるか

ら遠くないということであります。

經典はいよいよ極楽往生の方法について説法を進めることになります。しかしその前に人としての基礎的あり方について説きます。それが散善三福といわれるものであります。その第一は日常生活についてであって

「一には父母に孝養し、師事に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す」とあります。

とあります。十善業というのは悪いことをせずに善いことをするということで、この第一の福は、いかにも当然のように思えます。

しかし善導大師の疏によれば、大人になって家庭を持つようになり、親に孝養をつくさない者は「畜生と異なることなし」と極言されています。そして次のようなお話をされています。

あるとき飢饉に見舞われて、多くの人が餓死する程でありました。従って比丘たちが托鉢に廻っても食を得ることが困難でした。お釈迦さますら三日間何一つ食べずにいました。弟子の一人が大変に心配して、自分の着ていた三衣を売り払って僅かの食物を買い、お釈迦さまに差し上げました。ところがお釈

迦さまは、お弟子の苦心を喜ばれながらも食物を口にしませんでした。そしてお釈迦さまはお弟子に両親のいることを聞いて、その食物を両親にあげるように命じました。お弟子はお釈迦さまの食べないものを、両親は口にするわけがないといい張ったものの、結局お釈迦さまのいいつけで、お弟子はその食物を両親に食べさせました。次に第二には自分を律する方法であって

「二には三帰を受持し、衆戒を具足して、威儀を犯さず」とあります。

仏法僧に帰依して、規律にかなった行動をすることです。

第三には信仰生活の内容であって

「三には菩提心をおこし、深く因果を信じ大乘を誦誦して、行者を勧進す」とあります。

大乘を誦誦するということは大乘經典を何遍も繰り返して読み、繰り返してその意味をたずねることであって、あだかも鏡をよくみがけば、いよいよよくうつるのと同じことでもあります。そして自分ばかりでなく多くの人にも經典を説明して、一人でも多く仏道修行をするように導くことでもあります。

仕事のえらび方

二十四才のセールスマン、N青年としておきましよう。ある化粧品会社に勤めているそうです。「職業の適性を検査していただきたいのですが」ということで来所しました。セールスマンをしていると言うだけに、どこか人なつっこそうな調子で話しかけてくる青年でした。

職業に関する適性については、大雑把に言えば二種類の場合が考えられます。一つは、自分の適性について、殆んど問題なく検査成績如何によって、好きな職種を選択できる場合、もう一つは、そこに情緒的な問題がからんで、検査成績が自分の実際の能力や自信などとうまく結びついていかない場合です。N青年は、この後者の場合にあてはまるでしょう。

私は、このような相談を受けて、まず、N青年が職業というものをどのように考えてい

るのか、また、適性というものをどう考えているのかに疑問をもちました。そこで、今までの職歴を尋ねましたところ、高校を卒業して後の六年間に二回も勤めを変えているのです。はじめは技術的な作業に従事していましたが、夜勤があつて辛いからやめたということです。二度目は事務員になったのですが、仕事にあきたらなくなつて現在のセールスマンになったというのです。ところが実際にやってみるとこんな不安定な職業はないということに気づいたのです。性格は社交的で、別に仕事に苦になるわけでもないのですが、それだけで、成績を上げるのは決して容易なことではないからです。まして会社も中小企業ではあるし将来の不安もあります。職業適性検査では、事務的なものにも技術的なものにも向くと言われたのですが、本当はどうなのか教えて欲しいということでした。

このN青年の考え方には、いささか場あたるりで、小器用になんでも出来るようではあります。ところが、どうも、どれ一つにも自分の心を打ちこんでいるという感じが致しません。まして自分の職業を人に決めてもらおうなどと考えるのは無責任な感じも致しますが、いろいろ話し合った末、結局は自分の能力というものに十分自信をもてなかったこと、高校卒という学歴に常に不十分な気持を持っていたなどがわかってきました。私がこの点を指摘して、「職業というのは、能力だけでうまくいくものではなく、一定の能力の上に、自分が本当にその仕事に打ちこむ気持がなければならぬ」ということを話しますと、彼は自分の心に言いかけさせるようにして、次のような事を語りました。

「今まで自分が仕事に打ちこめなかった理由がよくわかりました。これからは迷わないでセールスという仕事の難かしさに向つて、積極的に勉強していこうと思います。そうすれば高校卒業の学歴だって少しも不安ではないと思えるようになりました。」

このN青年の考え方には、いささか場あたるりで、小器用になんでも出来るようではあ

三角形の怪異

中村 昌治

わたしの住む町の小字に三角山さんかくやまというのがある。また小字稲荷前こやまのことを俗に三角山と呼んでいる、どちらもだいたい三角形の地形ちけいである。現在この土地については何の伝承もない、おそらく忘れ去られたのであろう。

しかし三角形のことは時々民俗学にとりあげられるので善いにつけ悪いにつけ何か怪異があるらしい。

まず祭礼に当たると、滋賀県湖北の菅浦では三角形の田を畦で囲みここを清浄な地として一切の不浄物の禁忌にしている、畦を作るにはそこから取った土でつくる。岐阜市美江寺みえじの狸々投げでは青竹の先に三角形の盆形の物をつけたもので露払いをして悪魔払いをする。

る。三河北設楽郡田峯や遠江の西浦などの田楽には股木にはさんだ白紙二枚折りの三角形で五穀豊穰を祈願する。山梨県南都留郡の道祖神祭のドンド焼きではトシガミサマノハシラを別に立てる、この柱には雑多なものをぶらさげる、その一つにヒイチという布を三角に縫い中に穀殻を入れたものがある、この柱は火に焼かず翌日の朝になって人々が集ってヒイチその他のものを持ち帰り門口につるして魔除けにする。神奈川県津久井郡青根では天神祭の朝、色紙で作った三角形の飾り物を社の木につるす、これをヒイチという。高知県安芸郡室戸町では恵美須祭、同西ノ宮では八王子宮の祭に頭家の家に町民がヒウチという三角形の飾り物を贈る、頭家ではこれを壁ぎわに幾十となくつるす。

また、神奈川県の旧高座郡と旧愛甲郡には江戸時代このかた、川崎市稲城の真照寺から「めぐり地藏（子育地藏）」が送り出され、村から村へとめぐり歩く、村々では一―二軒の家を宿にして附近の老人が集って来て念仏をする、その時、子を持つ母親や子供たちが参詣する、この際の供物に色付きの布で作った三角や小猿または学校の成績物など逗子に結びつけて次ぎに送るということがあった。

長野県北ではチヨウチヨウちようちようといって正月の若木に三角形の切餅を飾る。東北地方ではヒウチブクロひうちぶくろといって色布を三角に縫った小袋を神仏に上げたり幟のぼりの下に付けたりする。

次ぎに葬送儀礼では、死者の首にかけてやる頭陀袋の三角形なのは全国的に通例のようだ。また死者の額につける三角形がある、この三角形は死者だけにつけるのではなく死者の家族や親類近隣まで葬儀にかかわる者みなつけるというのが多い。石川県能美郡では紙や布で作った三角形のものをミカクシと呼ぶ。山形県飛鳥とびしまでは近親者は頭に三角形の布片をあててその上に白布で鉢巻をする、これをミカクシと呼んでいる。新潟県東頸城郡浦田村ではサンカクガミさんかくがみといって三角形の白紙の両端に糸を結んで額につける、婦人は葭やの茎に三角を挟み襟にさすという。同東蒲原郡東川村ではカンムリかんむりといって会葬者は四角の布を二つに折って三角形にしたものを前額につける。神奈川県の北相地域では葬家の入口に虎除けとらよけという半紙を三角形に折ったものに

十方姿伽梵の五号を書いてさげる、会葬の近親者は金剛杖といって長さ十糎くらいの割竹の柄に白紙に「扶^{たす}って過ぐる断橋の端・橋下伴って帰る無月の村」の漢字を一字ずつ書いたものを三角形に折って挟んだもの一本あて

持って葬送する、そして埋土の時に墓穴に投げ入れる、ただし喪主のものは持ち帰って草履の片鼻緒を切断したものの上に突き挿して門口に置くというのが慣例である。
とにかく三角形については、現在、人によ

っていろいろ論じられているがまだ定説はないが何か怪異があることだけは確かである。これが解明にはまだ前途があり研究が必要だと思われる。

現代語訳 歎 仏 偈

―その二―

吉 田 定 久

光明威相

世の人々は

震動大千

感動す、

(5) 深諦善念

(6) 正しき法を

功德無量

人の雄、

諸仏法海

善く念じ

(6) その様な王には、愚痴も、貪欲も、怒りも

(7) 王の「人々を教化なさった…今日までの…広大な功績」、それを推進して来られた「深妙な御智慧」、又、「尊い御姿を以て今も猶続けていらす御活躍」等は、世の人達が共に感動する所であります。

窮尽深奥

奥をも底をも

ございません、夫は現在だけでなく、将来

(8) 願我作仏

(8) 王に等しく

究其涯底

究め給う、

永くそうでございます。獅子は百獣を征伏する能力と威厳を持っていると云われます

齊聖法王

我も又

(5) 王は先輩（仏…如来）から教わった正しい教法を、素直に御受けになり、善く心に掛けて、遂に其の奥底を究わめ…真理を悟られ…た御方でございます。

が、王は身内、身外の悪魔を征伏された能力と、威厳のお方でございます。獅子王と申しましょうか、人類の雄者でございます

過度生死

迷いの界

いにかけて、遂に其の奥底を究わめ…真理を悟られ…た御方でございます。

が、王は身内、身外の悪魔を征伏された能力と、威厳のお方でございます。獅子王と申しましょうか、人類の雄者でございます

魔不解脱

脱れなん

理を悟られ…た御方でございます。

が、王は身内、身外の悪魔を征伏された能力と、威厳のお方でございます。獅子王と申しましょうか、人類の雄者でございます

(8) 今日此の機会に私も「王と同じ様に雄者（仏）になりたい」と決心致しました、即ち迷いの苦境から脱れ出て、悟りの楽界に…仏として…生きたいと思うのであります。

(6) 無明欲怒

(6) 王には愚痴と

功德の程は到底御量りできません。

即ち迷いの苦境から脱れ出て、悟りの楽界に…仏として…生きたいと思うのであります。

世尊永無

欲はなし

(7) 功勲廣大

(7) 救いの功と

人雄獅子

げに獅子王か

智慧深妙

妙智慧に



◇お盆のいわれについて、お話してください。

お盆とは、インドの古い言葉のウランバナの音訳です。それがウラボンとなり、ただ、「ぼん」というようになり、さらに、おの字をつけて「おぼん」というようになりました。

七月十五日は、中元にあたり、きびしく自分を反省し、すぎ去った罪過を懺悔すべきであるということです。年頭に「今年こそは」と決心した発願に対する中元であり、中だるみになえた自分に、再びきびしく鞭うつ日、すなわち心のネジをまく日なのであります。

静かに、いま生きている自分をじっと反省してみるときに両親や、祖先よりうけた数かずの恩に感謝せずには、いられ

なくなってくることでしょう。お仏壇に、西瓜や、枝豆などお供えしたり、お盆に咲く花々をお供えするのは、わたくしたちの亡き人びとに対する感謝の気持ちのあらわれなのです。さらに、お盆は、ただ単に、過去の生命を尊重し、感謝して生きている者の責任を、反省するばかりではありません。現在に生きる人びとに、社会の同朋に、あたたかい情愛の手をさしのべるよう、心がけることも大切なことでありましよう。

お盆行事にあわせて、思い出すのは、盆踊りがあります。むかし、お釈迦さまのお弟子に目連尊者という人がおりまして、神通力という不思議な力をもっており、ある日、亡くなった母はどうしているだろうと、そのすがたを探してみると、骨と皮ばかりにやせたお母さんをみつけたのです。早速、食ものをささげると、どうしたものか口のところまでもってくると、急にもえてしまうのです。目連尊者は、この母のすがたを悲しみ、お釈迦さまに、そのことを申し上げますと、七月十五日の僧の自恣の日に、心づくしの百味飯食を供食することによって、お母さんを救うことの教えをうけて、供養をつくし救うことができたと伝えられています。

そのとき、目連はうれしくて手をうって喜び、その姿が踊りでもおどっているように見えたのが、盆踊りのはじまりだ

と伝えられています。また、踊りの輪のように、いつの世も仲よく手をつないで行くようにと、そんなことも盆踊りが教えているのです。

お盆は、年にいちど、過去、現在の父母の恩徳を感謝する仏教的行事の一つになったのでありましょう。

◇お盆の前後におこなわれる、お施餓鬼とは、どんな意味ですか

お施餓鬼とは、文字通り、餓鬼に施すことです。よく子供のことを「ガキ」といいますが、子供が満腹であっても食物がある限り、欲ばってたべたがるところからきているのです。

古いインドのお経に、阿難尊者が、焰口餓鬼に「汝の命は三日のうちに尽きて餓鬼となる」と責められ、そのことを釈尊にお話して、施餓鬼の法、福德寿命皆増長の法を教示されて、その法を実践して延命長寿を保ったということです。

わたしたちは、いずれにしても煩惱の身であり、不平や欲望など何かにとらわれ、なやむことが多いのです。そのように迷い悩んでいる姿は餓鬼ともいえるでしょう。

施とは、布施のことです。布施には、財施、法施、無畏施などと、物質的、精神的、仏教的な施しがあります。この教

にある、いろいろな苦悩を省りみて、亡き人びとのみ魂をまつり、追善供養することが、施餓鬼法要の意味であります。お盆や、お施餓鬼の行事を通して、亡きみ霊を偲び供養するとともに、今日の自分をかえりみて、自分のできる限りの力を一切にささげるといふ気持ちを養うことも、また、その意味するところであります。

力おしみをすることなく、隣人や、職域のなかで、正しい力の出しあいをするのが、仏教徒としての、施しの実践行です。

相手の立場にたって、思いをめぐらし、お互に、勇気づけ、いたわりあって、社会生活をいたしたいものであります。

業界一の銅瓦・銅板葺一般・模様葺・別製

金具一式私の先祖の宮及び寺、六角堂、納

骨堂及び鐘楼の銅材一式手間代も寄進、神

様仏様へ報恩の奉仕故安く良く、他所には

出来ない何代も研究せる卓越せる最高技術

最低価請負業者も悔なき様。御相談無料。

東京都文京区春日1丁目8の28

銅瓦職協
相談役顧問
設計及監督

黒石工業

電話 (812) 1 5 5 1

一揆と河三と康家

— 光曙の平和 —



泉 湛 田 鶴

いつまでもやみそうもない一揆の動乱に巻き込まれて、家中の者同志が血塗れとなって無益な戦に明け暮れるのは愚の骨頂である何とか早く終熄せしめたいと希っている家人も少くはなかった。齊藤五右衛門もその一人であった。

土呂の善秀寺に立籠っていた吉田太郎左衛門は一向門徒ではなかったが、本多正信とは厚い交友の仲だったので、彼にすすめられて一揆に与っていた。

吉田と齊藤とは知己であったので、齊藤は吉田に親書を送ってこう説いた。

「今度、各々方々は重代の主君の恩を顧みないで不義の一揆に与し、叛逆の名を残すことは、全く無智且つ無道とも云うべきことであらう。一日も早く天命の程を思つて、君臣の道を守つて降伏すべき計を廻らすべきではあるまい

か。尚、本多蜂屋等にも貴殿よりよくよく諫めて、早々罪を主君に謝するよう取り計られよ」

友を思い主君を思う真情あふれる文字が、つづられてあった。

この頃は、吉田も主君との道理に合わない戦に、大きな疑問を胸中に抱き始めていた際だったので、齊藤のすすめをもっともなものと、早速に同意を示して来た。

この趣きを吉田は直に本多と蜂屋に語ったが、本多は、せせら笑つて、

「この期に及んで、今更何の降伏を！」と、頭からはねつけてしまった。

血の気の多い正信は、尚も決戦をするつもりなのか、頑として初志を譲さなかった。

蜂屋は大久保党の近縁だったので、五良右衛門忠勝も、家中が真二つに分れていつまでも争うなどこの上もない愚なこととしきりに論じた。

もともと蜂屋は、一揆の発端となった菅沼定顕のなした行為にいたく憤慨し、又、酒井正親に対する個人的な反感から一揆に与しただけであつたので、彼は親友の治右衛門忠佐

を頼って降伏を願ひ出て来た。

一揆の兵の首魁ともいうべき蜂屋が翻意したので、解決の緒を見出したとよろこんだ忠勝と忠佐の二人は、「あの寛仁な殿故必ずき届けてくれるに相違ない」と思いつつ家康の前に四角に座って、

「只今、海内乱れに乱れて天下の英傑各地に割拠し、他領を切り取って自国を拡張、旗を都に掲げようとしています。然るに御家を見ますれば、譜代重恩の御家人の過半は宗門に迷って怨敵となっておりまゝする。この虚を窺って近隣の敵国押しよせ御領を侵掠するよなことがございますれば、これこそ由々しい御家の一大事にございます。それ故、一刻も早く一揆の輩の罪をお許しあつて、速かに帰順せしめ給うべきであると存じまする」

御家の前途を憂えて訴えた。

「さように案ずるならば、その方達よきに計らえ」

と、思ったよりあっさり二人に一任されたのであった。

よろこんだ忠勝、忠佐は早速に蜂屋を初め石川善左衛門、同半三郎、本多甚四郎等に逢

うと、彼等はいずれも「いかなる処分を受けてもいいませぬ」と申し出た。

そこで、彼等の外五六名を同道して家康の前に出で、今度の不明を心から詫び、

「御存分に成敗を」

と、言葉と共に一同ひれ伏した。

しばし息づまるような沈黙が流れた。

豪放な蜂屋も恐々とおびえて小さくなり、穴があれば這入りたいような気持で、全身に羞恥の油汗がにじんでいた。

まるで悪戯をした子供が、父親の前にあやまつてゐるような恰好で、蜂屋の目からはボロボロと大粒の涙さえ疊の上にこぼれていた。家康から赦すとの一言を耳にした一同は、再び頭を疊にすりつけた。

蜂屋等は家康の許を辞去すると、その帰途唐津の浄土宗光西寺に集つて、自分等は赦されたものの今後どうすればよいかと、方策を計った。

「かくの如く寛大なるお赦を蒙った上からは、我等が御手先となつて一揆の立籠る寺々を踏潰すことはいと易いことでござるが、先ず御領内の全体の静謐ということ、速にす

ることが第一に必要であらう」

との蜂屋の意見に従つて、一揆切り崩しの条件として、次の三ヶ条を挙げることにした。

一、この度、一揆に与せし家中の諸士の本領安堵されること、

一、土呂、針崎、野寺の三ヶ寺初め道場及僧俗共に、元の如くに建置かるべきこと、

一、一揆の張本人の一命を助けるべきこと
彼等の意見を取りまとめると、忠勝、忠佐に申し出で、

一揆に与した家中の者も、もうこんな無益な戦をやめて、以前のように殿に忠節を尽したいと願つてゐる者が沢山いることなれば、この三ヶ条おきき届け下さるよう殿にお願いしてくれまいか」

と願つた。

甚だ一方的な虫のいい申し出であるばかりか、これは容易ならざる条件とは思つたが、忠勝、忠佐の二人は岡崎城に行つて、彼等の降伏条件なるものを家康に報じた。

一部始終をきき終ると、家康はおもむろに口を開いて、

「前の二ヶ条は、望みの如くに仰せつけよ

う、……だが、……一揆の張本人を助命の願は相叶わぬぞ」

きびしい口調で、峻拒されてしまった。

上宮寺等の三ヶ寺の僧は一揆の張本人であるが、沙門の身である故に死罪を免じててもよいが、彼等に加担した家人は一人残らず誅罰せよとの厳たる態度であった。

思いの外家康の強硬な態度に驚いたが、これ以上何とも云うべき言葉もなかったので、顔くもらせながら二人は辞去した。

すると暫くして、忠勝の父、忠俊入道常原が老体をひっさげてあわただしくやって来た。

「殿の仰は尤もなことながら、それにてはこと速に治りがたく存じます。老臣の子孫一族、昨秋以来日々悪戦を重ね、或は傷つき又は討死いたしましたがこれ全くお上の御為なりと思えますれば、いささかも悔ゆることはございませぬ。ただし彼等の忠節を哀れと思召さるるならば、某が一族等の褒賞にかえられ、せがれ忠勝、甥忠佐のお諫め申し上げましたる如く、残らずおゆるしの上、何卒御助命願わしう存じます。……只今の三河をめぐる情勢をお考え御らんじませ。味方の軍

勢多く無益の戦に疲労いたしまするこの時弊に乗じ、駿河、甲斐兩國の敵、三河に押し襲い来ますれば、外大敵を受け内不和にして誠に危い時期にございます。それ故、彼等をお赦し給うなれば、彼等はよろこんで先手を承り、上野の酒井將監の如きは忽ち踏みにじますし、ましてや吉良殿や荒川殿などは、その日のうちに押しつぶすことはいと容易いこと、かくして西三河を略定され、御家の礎を堅固になし下されることが、今日の急務かと存じます。これ老臣の老後の唯一のお願いにございます。何卒、まげてお赦し願わしう存じます」

老いの目をしばだたいて、三河をめぐる情勢を縷々述べ、赤心を吐露して訴えたのであった。

これより以前にも、織田信長は家臣の滝川一益を使者として、

「早く一揆の罪を赦されて、遠州を攻め給われ」

と、懇懇して来ていたし、尚又、水野下野守信元も、和平のことを再三家康にすすめていたのであった。

そんなことを考え併せ、「人主短を護し諫を拒くときには、臣僚口を杜ぎ阿順するをつとめとす、これ国家滅亡のはじめなり」との古人の詞を思い、涙にむせぶばかりに訴える律儀な老臣の苦衷を察してか、忠俊の言を納れ、終に忠勝等の願の如く赦すこととなった。

三月二十八日、蜂屋等は上和田の浄土宗浄聚寺に於て、

今日より以後、一向の宗門を棄て、幕下に属し忠誠をつくすべき旨の起請文を、各自認めて差出し、家康からは蜂屋等に願の如く赦すとの御書が下されて、ここに始めて和議が成立したのであった。

赦された蜂屋等は、悪夢を見ているような血腥い家中の動乱だったことにゾツと寒気を催し、感慨無量で胸が一杯だったろうし、忠勝、忠佐は努力の実が結んだことをよろこんだのは当然である。

直ちに家康の命によって、石川日向守家成が精兵を率い、喜び勇む蜂屋を案内者として先ず土呂の善秀寺へ向った。

砦の門を固めていた一揆の兵は、蜂屋が新しい多数の同志を率いて戻って来たと打ちよ

ろこんで門を開いた。

石川勢はすっかり寺内に入ってしまったと、素早く陣を敷き、一度にどっと堂宇も破れんばかりに威嚇の鬨の声をあげた。

その声に、寺に集結していた一揆の群は、初めて攻められたことに気付いて、忽ち騒然となった。

右往左往する一揆勢に、馬上の石川日向守は大音声に、

「奴原！ よく承れ。その方達が柱と頼む蜂屋は既に降ったぞ。我君より一揆に与した者の罪を赦すとの寛大なる御赦面があったぞ。降る者は案ずるな。本領安堵も致されようぞ。けだし落ちたき者は、早々ここから落ちるがよい」と呼ばわった。

「何をほさくな！ 仏敵を倒せ！」

尚も、口きたなく喚きたてる者もいた。が大勢は既に傾いていた。しばし混乱に陥ったが、既に戦に飽いていたのか、前非を悔い戈をすてて降伏を申し出る者が続々と出て来た。

そのうちに、あちらにもこちらにも、「ウ

ワツ、ウワツ」と歓声がまき起った。狂喜して互に抱きあい跳ね上る者もいる。男泣きに泣いている者もいれば、手を合せている者もいる。

而し降伏をいさぎよしとしない者は、雪崩をなして針崎方面へ逃げ出して行った。

石川日向守は更に手勢を率いて、逃げ行く一揆を追うて針崎へと向ったが、高須口から勝靈寺に攻めよせると、寺内へ無数の火矢を放った。

またたく間に、莊大を誇る堂塔、伽藍、僧房、寮舎から、紅蓮の火をメラメラ吹き初めた。

有勢なる石川勢に攻め立てられた一揆共は狼狽を極め、煙にむせび猛火に追われ逃げまどった。

その間を馳せめぐりながら日向守は、

「一揆共、悉く助命あるぞ」

と呼ばわり呼ばわった。

その頃、謀叛となると妻子一族あげて鼻首か献門の極刑に決っていたこととて、一揆に与した以上は、所詮知行も没収され、命もないものと覚悟していたのに、本領もそのまま

に安堵され、助命あるときかされて武器をその場にすて、ここでも亦「ウワツ」と天地にとどろくばかりの歓声があがった。

今や彼等は反省し、無意義な抵抗をいつまでも続ける愚さに、気づいたのであった。

善秀寺の一揆が降り、次いで勝靈寺が焼き払われ、そこに立て籠っていた一揆も降伏してしまったことを急使によって知らされると佐崎上宮寺、野寺の本証寺に立籠っていた一揆勢も、事態の急変に驚き既に形勢の非を覺って、皆思い思いにいずこへか姿を消して行った。

こうして一揆の本拠は今や完全に雲散霧散してしまつて、残る者は吉良等の如き今更寝返りも出来ぬ初めからの野心家のみとなつてしまつた。

ここに始めて、去年九月以来五ヶ月に渡つたさしもの激烈を極めた一揆騒動も終焉に近づき、三河の天地にもようやく青空が見え始めたのであった。

絵	連
話	続

みんなの法然さま

— 帰依する人々 —

高橋良和

さしえ 小林健造



大衆のためのおしえだからといって、おしえに上下の別あるわけではない。

真に大衆を救うためのおしえであってこそ、上天皇も導くことが出来るのである。

京都で道を弘めた法然上人のおしえは、天皇まで帰依されたという、それほど平易なそして普遍的なものであった。

まず文治四年の八月には後白河法皇が、法然上人を皇居に招いておられるのである。それは古く天台の慈覚大師によってはじめられたという、如法写経会という行事のときが最初であって、お写を写すというなかなか厳肅うちにも意義深い行事であったのである。

そのときには天台宗の名僧たちもその席に待っていたようであって、何日もかかつてこの写経会が営まれたので、法然上人はその中心的な役割をしたのである。

こうしたことがあって、宮中との縁が出来ると、その後つづいて高倉天皇のときに、授戒（じゅかい）を天皇に授けているのである。授戒という儀式は、仏教徒としての日常の規範となることを授かる儀式であって、古く中国から日本に伝えられて、それが一つの仏教徒の生活信条ということで、大衆にも普及したのである。

それから後白河法皇も、後鳥羽天皇もそれぞれこの授戒を受けるのに法然上人を宮中に招いておられるのであるから、



法然上人は三天皇の戒師ということである。

これは日本仏教史上大変なことであって、如何に法然上人のおしえが立派であり、且つ大衆を救うものであるかがこれをみてもわかるのである。

吉水の庵室には方々から道を求めてくる人が多く、上人の身体は日に日に忙しくなってきたようである。

こうしたなかに特に法然上人に深く帰依した人があった。それは九条兼実公である。当時この人のことを法性寺（ほつしょうじ）殿とも、九条関白殿下ともいっていたので、当時の貴族のなかでも最右翼の人であることはわかりきっている。

この九条兼実公が法然上人のおしえに帰依していたおり上人を招いて道を求めたのである。

そこで、この関白殿下があるとき多少不快で病氣にあった法然上人のことを聞いて、もしこのときに上人に先立たれては、折角浄土のおしえを求めていたのに、その真髓にふれずに終ることがある。これではなにもならぬということ、ある日のこと、使を法然上人のもとに派遣して、上人のおしえの真髓を書き残して欲しいとたのむのである。

そのときのことを、古い書物ではこう書いている。

浄土の法門年来教誨をうけたまわるといえども、心腑にお

さめがたし、要文をしるしたまわりて、且つ面談になずらへ且つは後の御かたみにもそなへ侍らん
というのである。

なるほどよきことに気づいたものである。もしこのようなねがいがなかりせば、或は浄土宗のおしえの真髓を説いた書物は残らなかったかもしれないのである。

そこで法然上人は、思いきって筆をとることを約束するのであるが、この九条兼実公の求めに応じてつくられたのが、名高い選択集（せんちやくしゅう）である。

この選択集ということは、あらゆる往生の手だてとなるもののなかから、何故に念仏をとりあげるか、いわゆる選択（せんたく）するということを書いた大切なものであって、そのなかでも、往生のためには念仏が第一であると、はっきりいい切っているところにこの書物に対する法然上人の自信というのか、熱情というのか、それがあらわれていて実に立派な書物であって、親鸞聖人も、この選択集を非常に大切にしているし、各宗派の人たちもこの選択集の著述を高く評価しているのである。

こうしたことが因縁となって、その後九条兼実公は剃髪（ていはつ）してひたすら上人に帰依するのであるから、如何に上人にすがっていたかがわかるのである。

こうした当時の権門の第一人者が上人に帰依したという影響は、当時の社会では大変なことであつたと思うのである。

当時源平二氏の対立あり、世のなかには血なまぐさい風が吹き、いついくさがはじまって自らの身に及ぶかわからないときであつたから、心ある人々の間では、自らの心をおちつけ且つそのいくさにのぞんでも心身ともに真に武士としての腹づもりが出来る、といったことをねがう人が多くなつてきたのは時代の流れといえるので、世のあわただしさをのがれて道を求める人たちが多くなつてきたのである。

それも武士であるから、そのときこの浄土のおしえを説いた法然上人の存在は実に偉大なる太陽であつたといえるのである。そこで上人のもとに道を求める人々がどんどん増えてくるのであるが、そのなかには平経宗といわれる左大臣、また左大臣の兼雅公、右京権大夫隆信朝臣、野の宮左大臣公繼民部卿範光公などのいわゆる当時の公家や、武士の第一線的な人物がそれぞれこの法然上人にすがつたのである。

いずれも念仏の人となつて、真剣に道を求めたらしく、これらの人々は、その往生のときに実に立派な最後臨終を送っている点で、上人の念仏のおしえがほんとうに立派なおしえであることを立証しているようなものであつた。

ご法語をいただく

念仏をば金にたとへたる事にて候。金は火にやくにもいろまさり、水にいる、にも損せず候。かやうに念仏は妄念のおこる時申候へどもけがれず。ものを申まするにもまぎれ候はず。(勅修御法第二十三)

お念仏をものに喩えて申すならば、黄金のようなものであります。黄金は火中に入れて焼いても、その輝きが失せるものでありません。また水中に入れても錆びたりしません。

このようにお念仏は、心の中に執念がさ迷い悩む時に称えても、けっして功德に傷つくことがありません。またお念仏は、何か語りながら称えていても、他に紛れて功德がなくなるようなことはありません。

法然上人はこのように申されてから、更に言葉をつがれました。

こうしたわけを心得ていて、お念仏を称えるには他事を混えることのないようにし、十遍でも二十遍でもお念仏の数を多くするよう

にするのがよいのであります。このことをうっかりしていて、お念仏を称えながら何か他の事を思い出したり、語り出したりしてしまい、これはいけないことをしてしまったと感じ、いま称えたお念仏は功德がないかも知れぬと考えるはいけません。けっしてそのようなことはないのであつて、どのような場合、どのような雑念に追われていても、お念仏を称えれば必ず往生の業になるのです。

さて法然上人はこうした御注意をいたるところで繰返し申されています。お念仏を称えれば往生できるということは、その人がどのような人でも変わりありません。智者であつても無智の人でも、規則正しい人であつても、無頼の人であつても同じことであります。お念仏を称えている時に雑念のわからない方がよいのですが、たとえ雑念のためにお念仏がとぎれとぎれになつたにしても、お念仏の功德に変わりはありません。

こうしたお教えをいただく時に、あるいは余りにも程度の低い者だけを相手にされていくように思う人があるかも知れません。何か余りにも安易すぎるように考えて、自分はそ

れ程までに論されなくてもよいように考える人があるかも知れません。法然上人の御法語は極たんすぎて頼りないもののように感ずる人がないとはいえませんが。しかしこの人々、もう一度自分を正直に見つめて、よくよく反省しなければなりません。そうすれば御法語が安易であるのではなく自分の心の中に安易さが横たわっていることに気がつくのであります。善導大師は三心を説明して、その中で次のように申されています。

「一には決定して深く信ず。自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁あることなし」と即ち自分は罪惡生死の凡夫であることを深く信ずることが第一に必要なこととされています。このことなくして浄土の法門はないといえましょう。一枚起請文に

「たとひ一代の法をよくよく學すとも、一文不知の愚鈍の身になして……」とあります。愚鈍にかえることは、愚鈍のままに放置することではありません。もとより浄土教は易行の法門であります、安易なことは違ふのであります。

心田をたがやし

無量の功德をうく

袈 裟

よく家庭で、積もるごみやほこりほどに物やお金が溜まればよい、と言うが、ちりあくたは、おのずから溜まるものである。庭先きの草にしても、引いても引いても、つぎつぎと雑草は根をはってくる。水田にしても、植えられた苗より、雑草はちきに繁茂する。



苗をよりよく育てて実り豊かなお米を獲るためには、たえず雑草を刈りとらねばならない。

わたしたちの心も同じように、たえずちりあくたを除き、雑草を刈りにとって、

よく耕やしておかなければ、清らかな心をもちにくいものである。ものごとの正しい判断を失って、自分かつてな、わがままな心がはたらいてしまう。

仏教は、もっとも身近かな、具体的なかたちを通して、真実なものを理解し、身につけようとする。

お袈裟は、元来、ぼろ布を継ぎあわせて作ったのがはじまりである。小さな四角な布をつき合せて、田のようなかたちをあらわし、田が水を貯えて、稲をうるおす有様を、仏法によって、人びとが潤るおすことをあらわすために、袈裟はそのかたちを作ったといわれる。袈裟のことを福田衣ともいう。

お袈裟は、仏教徒の標識であり、五条、九条、または二十五条などがあり、浄土宗の信徒は、五条の一つの威儀細を用いる。ねずみ色とか、茶色で、木綿や絹の地でつくられ、首にかけて胸のあたりにさげる。細い威儀が左右にあり、五条に仕立ててある。

この袈裟を被着して、心田を耕やし、無量の功德を生じて、自他ともに、法水に潤うがゆえに、福田衣といわれるのである。

編集後記

○梅雨の季節に入りました
本年は特に天候不順で御座
います。読者の皆様にはお
変り御座いませんか。まだ
当分の間うつとらしい日が
続くことと存じますが、毎
日を明かるい気持で生活す
るように心がけましょう。

○学生会館の運営問題に端
を発し、授業料値上げ問題
で火をふいたのが五か月間
にわたった早大紛争でした
が第一文学部と第二文学部
を残した全学部がスト中止
を決め、ほぼ正常化のレー
ルが敷かれたようでありま
す。一部の職業的活動家に
ひきずられ、いつまでも泥
沼闘争をつづけるべきでは
ないと思います。少数の活
動家たちに一般学生の教育
をうける自由を奪う権利は
ないわけで、残る二学部も
学生が自主的にバリケード

を撤去し、授業を再開する
体制をつくるよう強く希望
します。そして大学側も学
生たちが要求する大学の正
常化を実現し、学生の不信
感をはらうことに努力すべ
きです。

○六月は浄土宗の講習会が
各地で催され、浄土同人の
先生方も、竹中信常先生は
東北へ、中村康隆、安居香
山両先生は京都へ、御出講
されたようです。

○今月号はお盆特集号とし
て大正大学教授岡義豊先
生の玉稿をいただき、また
同人の中村康隆先生には編
集部企画のお盆と生活と題
する座談会に御出席いただ
きました。

○本年の日本印度学仏教学
会は、さる六月十一・十二
日の両日、和歌山県高野山
大学で開催されましたが、
本年より仏教学の応用部門

が新設されました。雑誌浄
土の応用部門としては、大
正大学カウンセリング研究
所の専任カウンセラーの口
さんに種々なケースについ
て連載していただいております。
御多忙のところ毎回
原稿をいただき編集部一同
恐縮致しております。また
ケースについて御質問でも
ありましたら編集部迄御寄
せ下さい。

○会員の皆様で在家の仏教
活動や、教区の活動、また
特殊な寺院活動をなさって
おられる方がいられると思
います。浄土誌上御紹介申
し上げたいと思いますから
浄土編集部宛活動状況をお
知らせ下さい。

○雑誌浄土の活動を充実さ
せるため、半期で会費切れ
の方および未納の方は会費
の払込みをお願い申し上げ
ます。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 七月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十一年六月二十五日 印刷

昭和四十一年七月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
会社

東京都千代田区飯田町一ノ二

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

△新刊の御案内▽

川内知光編

生きるための断片

定価 284円
送料 70円
B6判 四〇〇頁

1. 生きるということ……2. 憧れの心……
3. 仏はつねに……4. ただひたすらに

推薦のことは

小林大巖浄土宗務総長

教化資料といたしましても、類例の少ない良い資料

恵谷隆戒仏教大学長

人間形成に志す人、布教伝道に従事する人、良き社会
教養人として人生を全うせんとする人に是非とも

中外日報

伝道揭示にもってこい

発行所

京都市北区千本北大路上ル
仏教大学通信教育部

浄土トラクト

ものいう石	大正大学教授 竹中	信常著	新書判 150P	価 150円
諸仏の戒め		村瀬 秀雄著	B6判 4P	価 5円 10円
四季の寺まいり	大正教授 安居	香山著	新書判 20P	価 25円 10円
—浄土宗の年中行事—				
経本浄土宗檀信用のおつとめ	檀信用	村瀬 秀雄編		価 90円 20円
選択集私解	大正教授 竹中	信常著	新書判 120P	価 120円 30円
一枚起請文をめぐる		村瀬 秀雄著	新書判 102P	価 120円 30円
真理のはなたば	大正教授 佐藤	良智著	新書判	価 70円 20円
ご法語のしおり 葵ぐさ		村瀬 秀雄著	B6判 16P	価 15円 10円

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に (多数申込みには)
真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に 割引いたします

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (262) 5944
振替 東京 82187